

活動報告書

報告者氏名：内田潤一 所属：長野県長野養護学校朝陽教室 記録日：2012年4月26日

【対象児（群）の情報】

- ・学年
高等部3年生の男子3名（A. B. C）
- ・障害名
A生：知的障害 B生：知的障害 C生：知的障害
- ・障害の困難の内容
A生：地図を読むことが苦手。情報を取捨選択することが苦手。
B生：書くことが苦手。
C生：見通しが持てないと不安を訴える。急な変更などに抵抗感を示す。

【活動目的】

- ・当初のねらい
高等部に在籍し、企業就労を目指している対象生である。将来的には、余暇活動の一つとして、一人または同僚や家族と一緒に旅行を楽しみ、卒業後の生活に広がりを持って欲しいと考えている。1, 2年時には、書籍やパソコンで公共交通機関の乗り継ぎ調べや目的地までの道順などを調べたが、調べることを「面倒」と感じたり、パソコンで調べたことを印刷したプリントを持って移動することが難しいといった場面も見られた。そこで、修学旅行を通して、旅行の調べ学習から現地での行動について、iPadを活用することで旅行の仕方にどのような影響が出るのか観察することを目的とした。
- ・実施期間
iPadを使用した情報収集（調べ学習）は23年度から実施してきた。
修学旅行のグループ学習の中でiPadを活用して行動した（実施日、4月26日）
- ・実施者
内田潤一（長野養護学校高等部 朝陽教室）
- ・実施者と対象生の関係
副担任

【活動内容と対象生（群）の変化】

・対象生（群）の事前の状況

A生とC生は情報端末から情報を得るということに慣れていない様子であった。

B生は、日頃から携帯などから電車の時刻や知りたい情報を得ることができた。

・活動の具体的内容

（1）調べ学習

y a h o oやg o o g l eを利用して旅行の目的地を調べた。その際、ストリートビューなども活用して現地のイメージを持ちやすくすることを考えた。

（2）現地活動（校外活動）

アプリ「駅」により公共交通機関の乗り継ぎ調べや、アプリ「なびすけ」「方向マップ」などによる現地の把握や目的地までの距離や方位、ルート案内をおこなうことで、自分たちだけで旅を楽しめるのではないかと考えた。

・対象生（群）の事後の変化

i P a dを活用することで、パソコンよりも早く知りたいことを調べることができるようになった。

現地では、アプリを使うことで、目的地まで自力で行くことができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

（1）調べ学習

i P a dを活用し、目的地までの行程を自分たちで調べることができた。使いやすい乗り継ぎ検索アプリが出てきたことも、パソコンよりも使いやすいと感じた一因となっている。

（2）現地活動（校外活動）

旅行中は、i P a dを片手に現地で、公共交通機関の乗り継ぎ（図1）地までの道のりについて調べながら移動することができた。特に都市部の慣れない乗り継ぎであっても、運賃や所要時間、番線まで把握して移動できたので安心だったようである。



図1 駅構内で乗り継ぎの確認

・その他のエピソード

当初は、方向マップという大まかな距離や方向を指し示すアプリを使用（図2）していたが、C生にとっては情報が漠然としていたため見通しが持ちにくく、A生とB生の後をついていく形の参加であった。そのため、途中からルート案内の出るアプリ「ナビスケ」に切り替えたところ、目的地までの見通しを持つことができ、「自分についてきて」とi P a dを片手にA生とB生をする姿が見られた。



図2 位置や方向を確認

今回、3人が大きな画面を見ながら相談する姿があった。一人旅や慣れてくると重さや大きさ故の使い勝手が問われてくるが、今回はちょうど良いサイズであった。使用した生徒からは重さについての意見はあったが、比較的、便利であった、役に立ったとi P a dの使用について肯定的であった。